

複合形容詞の強勢型についての一考察

—— 4つの異なるタイプの辞書を用いた比較・分析

野上文子

1. はじめに

日本語に「通勤電車」「落ち着く」「青臭い」などの複合語があるように、英語にも複合語があり、複合語には、**greenhouse**「温室」などの複合名詞、**air-condition**「空気調節装置〔冷房〕をつける」などの複合動詞、**open-minded**「心の広い」などの複合形容詞がある。日本語だけではなく、英語にも単純語と合成語があり、英語の合成語は派生語と複合語に分かれる。派生語とは、**beautiful**, **teacher**, **entrance** などのように、単純語に派生接辞が付いてできた語である。複合語とは、**'beauty ,contest**, **'high ,school**, **'entrance 'examination** などのように、単純語または派生語が複合されてできた語であり、それぞれが独立して意味を成すことができる2語、あるいは3語以上の語が結合して形成されている。

前述の複合語の第1要素と第2要素に各々付記されている「'」や「,」の符号は音の強勢を表し、前者が第1強勢、後者が第2強勢となっている。強勢型とは、これらの強勢の組み合わせであり、**,open-'minded** のような「弱強」、**'beauty ,contest** のような「強弱」、**'entrance 'examination** のような「強強」の型が存在する。複合語の強勢型において、複合名詞については、Peter Roach (1983)、J. C. Wells (2006)、筧・今井 (1971)、影山 (2009)、窪菌・太田 (1998)、御園 (1995) など、多くの研究が行われてきた。しかし複合形容詞についての研究は数が少なく、その強勢型には不明瞭な部分が残されている。

複合形容詞の強勢型は辞書により異なる場合があり、一様ではない。辞書によって、「弱強」、「強弱」の2通りの強勢型だけを用いているものもあれば、「弱強」、「強弱」、「強強」の3通りの強勢型を用いているものもある。たとえば、後の調査で明らかになるように、*Longman Pronunciation Dictionary* (2008) では、強強型は一つも存在しないが、他の辞書では強強型が存在する。また、同一の複合語に対して、辞書により異なった強勢型が付与されている場合が

ある。なぜ、同一の複合語に対し、このように複数の強勢型が存在するのであろうか。その原因を解明する足掛かりとして、まず、本研究では、4つの辞書を用いて、複合形容詞の強勢型の比較・分析を行い、複合形容詞の強勢型について考察する。

2. 先行研究

複合語の強勢型については、明らかにされていない点があり、とりわけ、複合形容詞の強勢型については不明瞭な点が多い。複合語の中でも複合名詞については、多くの場合、強弱型の強勢をとるという複合語強勢規則が存在するが、それは、複合形容詞には適合しない。辞書を見ると、複合形容詞には、'northern, most'のような強弱型のみならず、'snow-'white'のような弱強型、'cold-'hearted'のような強強型が存在し、複合語強勢規則が当てはまらない。では、複合形容詞の強勢型について、どのようなことが明らかにされているのか、これまでの複合語に関する研究を踏まえて考察する。

2.1. Peter Roach (1983)

Peter Roach (1983) は、複合語の主な特徴について以下のように述べている。

This is called two words, both of which can exist independently as English words. As with many of the distinctions being made in connection with stress, there are areas of uncertainty.

(Roach 1983: 108)

ここで Peter Roach は、複合語が英語として独立し得る2語から成ることを述べ、複合語の強勢に不確定な領域があると指摘している。たしかに、弱強・強弱・強強という3つの型が存在することにより、紛らわしい現象が起きていると言えよう。

2.2. J. C. Wells (2006)

Wells (2006) は、複合語の強勢型について、以下のように指摘している。

Confusingly, some English compounds are double-stressed (also called 'late-stressed' or 'end-stressed'). Their main lexical stress is on their second element. They are usually shown in dictionaries with a secondary stress mark followed by a primary stress mark: ,Christmas 'Eve, ,Town 'Hall, ,gold 'ring. . . .

(Wells 2006: 105)

Wells は、英語の複合語には、第1要素に第1強勢を置く複合語強勢規則とは別に、二重強勢（後行強勢、末尾強勢）もあると述べ、それを Confusingly 「紛らわしいことに」と表現し、次のように助言している。

As can be seen, there are many irregularities and exceptions. In case of doubt, use your dictionary (or ask a native speaker) to check stress patterns.

(Wells 2006: 106)

Wells は疑問があれば辞書を引いて、あるいは、母語話者に聞いて、強勢型を確認することとしている。だが、ある複合語についての強勢型が辞書により異なる場合は、確認することができない。

2.3. 影山（2009）、窪菌・太田（1998）、御園（1995）

次に、影山（2009）は、複合形容詞の強勢について以下のように提示している。

複合形容詞のアクセントはさまざまで、'hand 'made, 'duty- 'free, 'ice- 'cold, 'soft- 'spoken などでは前部と後部が同じ程度か、むしろ後部のほうが強く発音される。複合形容詞のアクセントの法則はまだはっきり解明されていない。

(影山 2009: 226)

ここでは、複合形容詞のアクセントの法則は、まだはっきり解明されていないと述べられており、それ以上の言及は見られない。それだけ、複合形容詞の強勢型を特定するのは困難なことだと分かる。また、窪菌・太田（1998）は次のように述べている。

複合形容詞や複合動詞も基本的には複合名詞と同じ強勢規則に従うようであるが、意味構造の関係から例外も多くなる。

(窪蘭・太田 1998: 91)

こちらでもまた、複合形容詞と複合動詞の強勢については、はっきりとは意見が述べられていない。やはり、複合形容詞の強勢型を決定づける規則というものはないのであろうか。続いて、御園 (1995) を見てみよう。

結果として形容詞として機能する合形成容詞 (Compound Adjective) は、原則は前方強勢型であるが、2重強勢も多い。

(御園 1995: 283)

ここでもまた、強弱の強勢型と強強の2重強勢、2つのパターンについて言及しており、どちらがどのような基準で決定されているかについては示されていない。このように、複合形容詞の強勢は複雑で、強勢型を決定づける規則は、まだ解明されていないと言える。

3. 複合形容詞強勢型の比較調査

複合形容詞の強勢型は、'under'handed のような「弱強」、'on,going のような「強弱」、'lily-'white のような「強強」と3種類あるが、それらの強勢型は何によって決定するのか。その要因を特定するための足掛かりとして、まずは、日本とイギリスで編纂された4つの異なるタイプの辞書を用い、複合形容詞の強勢型を調査・分析する。

3.1. 複合形容詞の強勢型の比較・分析に使用する辞書

- (1) a. 小学館『プログレッシブ英語逆引き辞典』(1999) → 『逆引き辞典』
- b. 研究社『新英和大辞典』第6版 (2002) → 『新英和』
- c. *Longman Pronunciation Dictionary* (2008) → Longman (2008)
- d. *Oxford English Dictionary* 2nd ed. (1989) → OED 第2版

(1a) 小学館『プログレッシブ英語逆引き辞典』(1999) は2語から成

る複合形容詞について、2 つ目の要素が同じものを取り出すのに使用する。*open-minded*, *absent-minded* のように、2 つ目の語が同じものを抽出しやすいため、この辞書を用いる。(1b) の研究社『新英和大辞典』第 6 版 (2002) は、1931 年に刊行されて以来、英語学習者、研究者が多くの信頼を寄せている辞典であり、収録語数 26 万を誇る大辞典である。(1c) の *Longman Pronunciation Dictionary* (2008) は、Wells の名で知られるイギリスの発音辞典であり、発音に特化して編纂されている辞典なので、強勢型を知る上で欠かせない辞典である。(1d) の *Oxford English Dictionary* 2nd ed. (1989) は、収録語数約 29 万語、20 巻からなるイギリスの大辞典であり、(1c) の発音辞典がイギリスの辞典なので、編纂国が同じ (1d) の辞典を選んで、比較・検討に用いた。なお、以下、本稿では、(1a ~ d) のように辞書名を省略する。

3.2. 調査の方法

複合語は独立しうる 2 語から成り、その 1 語目を第 1 要素、2 語目を第 2 要素とする。まずは、『逆引き辞典』を用い、第 2 要素が同じ複合形容詞を取り出す。第 2 要素が同じ複合形容詞を抽出した後、*open-minded*, *absent-minded* のような第 2 要素が同じ複合形容詞のグループを作り、それらの強勢型を調べる。そして、それらの強勢型が単一でない場合は、各複合形容詞の第 1 要素の品詞を分析する。その後、『新英和』、Longman (2008)、OED 第 2 版を用い、それらの語の強勢型を比較する。なお、調査対象となる複合形容詞の第 2 要素は、中学校・高校で習得するレベルの語を筆者の判断により抽出し、16 種類の第 2 要素を含む複合形容詞 336 語で調査した。なお、調査対象語は付録として掲載した。

4. 複合形容詞強勢型の分析

4.1. イギリスと日本の辞書の比較

編纂された国の違いが強勢型表記の違いをもたらす可能性があるため、どちらもイギリスの辞書である、Longman (2008) と OED 第 2 版を比較してみた。すると、(2a,b) に例を挙げたように、編纂国が同じ 2 つの辞書においても強勢型はまちまちで、一貫性は見出せない。また、日本の辞書、『新英和』と『逆引き辞典』を比較した場合においても (3a,b) のように、やは

り強勢型の違いが見られる。

(2) イギリスの辞書による比較

a. Longman (2008)	b. OED 第2版
ˌoutˈgoing (社交的な)	ˈoutˌgoing
ˌbrimˈfull (涙でいっぱいの)	ˈbrimˈfull (properly pronounced ˈ ˈ) (erroneously pronounced ˈ ˌ)

(3) 日本の辞書による比較

a. 『新英和』	b. 『逆引き辞典』
ˌcack-ˈhanded (左利きの)	ˈcack-ˈhanded
ˈbackˌhanded (ぎこちない)	ˈbackˈhanded
ˈheavy-ˌhanded (不器用な)	ˈheavy-ˈhanded

4.2. 第1要素の分析

第1要素の違いが強勢型の違いを生むのかどうかを検証するため、『逆引き辞典』を用い、**-handed**を第2要素に持つ複合形容詞を取り出し、強勢型を弱強、強弱、強強に分類し、それぞれの第1要素の品詞を分析した。また、それらの語を『新英和』、Longman (2008)、OED 第2版でも調べ、結果を(4) - (7)の表にまとめた。たとえば、(4)の弱強型に挙げた **cack** と **under** であれば、それぞれ、**cack-handed**, **under-handed** となり、第1要素である **cack** や **under** の品詞を特定したのが次の表である。

(4) 『逆引き辞典』における複合形容詞 **-handed** の第1要素の強勢型

弱強型	cack (名詞) under (前置詞)
強弱型	back (形容詞) heavy (形容詞)
強強型	ham (名詞) bare (形容詞) empty (形容詞) even (形容詞) free (形容詞) high (形容詞) left (形容詞) open (形容詞) red (形容詞) right (形容詞) single (形容詞) two (形容詞)

(4) 『逆引き辞典』を見ると、**cack-handed**, **back-handed** のように、第1要素が名詞・形容詞の場合は弱強・強弱・強強、いずれの型にもなる。

under-handed のように、第 1 要素が前置詞の場合は弱強型のみ生じる。次に、『新英和』における複合形容詞 **-handed** の第 1 要素の強勢型をまとめたものが (5) の表である。

(5) 『新英和』における複合形容詞 **-handed** の第 1 要素の強勢型

弱強型	under (前置詞)
強弱型	なし
強強型	cack (名詞) ham (名詞) back (形容詞) bare (形容詞) empty (形容詞) even (形容詞) free (形容詞) heavy (形容詞) high (形容詞) left (形容詞) open (形容詞) red (形容詞) right (形容詞) single (形容詞) two (形容詞)

(5) 『新英和』では、第 1 要素が名詞・形容詞の場合は強強型となり、前置詞は弱強型となる。次に、Longman (2008) における複合形容詞 **-handed** の第 1 要素の強勢型をまとめたものが (6) の表である。

(6) Longman (2008) における複合形容詞 **-handed** の第 1 要素の強勢型

弱強型	cack (名詞) ham (名詞) back (形容詞) bare (形容詞) empty (形容詞) even (形容詞) free (形容詞) heavy (形容詞) high (形容詞) left (形容詞) open (形容詞) red (形容詞) right (形容詞) single (形容詞) two (形容詞) under (前置詞)
強弱型	なし
強強型	なし

(6) Longman (2008) では、第 1 要素が名詞・形容詞・前置詞、いずれの場合も弱強型となる。最後に、OED 第 2 版における複合形容詞 **-handed** の第 1 要素の強勢型をまとめたものが (7) の表である。

(7) OED 第 2 版における複合形容詞 **-handed** の第 1 要素の強勢型

弱強型	cack (名詞) under (前置詞) free (形容詞)
強弱型	back (形容詞) bare (形容詞)
強強型	empty (形容詞) heavy (形容詞) open (形容詞) two (形容詞)

* なお、**Stress variable** という注記のある語については分析対象外とした。

(7) OED 第2版では、第1要素が名詞の場合は弱強型になり、形容詞の場合は弱強・強弱・強強、いずれの型にもなる。前置詞は弱強型のみ生じる。しかし、これらを見ると有効な一般化を見出すことは困難である。第1要素が名詞・形容詞の場合はどの強勢型にも成り得る。前置詞に関しては、(4) - (7) の表では全て弱強型になる。ところが、同じ **under** (前置詞) を第1要素に持つ語でも 'under ,ground, 'under ,grown, 'under ,hand など、強弱型の複合形容詞もあるため、第1要素が強勢型を決める原因になっているとは言えない。

4.3. Longman (2008) とその他の辞典の違い

調査対象とした複合形容詞 336 語に関する強勢型のパターンを (1a-d) の4つの辞書で調査し、表にまとめた。本稿では紙面の都合により、その一例のみを紹介したものが (8) である。なお、表中における強勢の型は、弱強を①、強弱を②、強強を③、強勢型の表記のない場合は④とした。たとえば、複合形容詞 **back-handed** の強勢型を辞書で調べると、『逆引き辞典』では②の強弱、『新英和』では③の強強、Longman では①の弱強、OED 第2版では②の強弱であった。このように、複合形容詞 **back-handed**, **bare-handed**, **cack-handed**, **under-handed**, **empty-handed**, **even-handed**, **free-handed** の強勢型についてまとめたのが (8) の表である。

(8) -handed を第2要素とする複合形容詞の強勢型

	『逆引き辞典』	『新英和』	Longman (2008)	OED 第2版
back	②	③	①	②
bare	③	③	①	②
cack	①	③	①	①
under	①	①	①	①
empty	③	③	①	③
even	③	③	①	④
free	③	③	①	①

このように、各辞書における強勢型を調査した上で、それぞれの辞書における強勢型の数を特定し、弱強型の数、強弱型の数、強強型の数を表にしたものが (9) である。表中における強勢の型は、弱強を①、強弱を②、強強を

③とした。なお、極めて少数ではあるが、2つの強勢型が併記してある場合があり、その際は、当該辞書における優先順位の判断に則り、一番目の強勢型を採用した。また、強勢型の表記のない場合は④、調査語が当該辞書に記載されていない場合は⑤とした。

(9) 各辞書における強勢型の数

	①弱強	②強弱	③強強	④強勢型の 記載なし	⑤調査語の 記載なし
『逆引き辞典』	8	174	82	72	0
『新英和』	4	213	117	2	0
Longman (2008)	150	186	0	0	0
OED 第2版	67	197	13	53	6

(9) の表を見ると明確な違いが見出される。『逆引き辞典』や『新英和』、そして、OED 第2版では、③の強強型が生じるのに対し、Longman(2008)では③の強強型が一つも生じない。また、日本の2つの辞典においては、'bare-'handed, 'right-'handed のような強強型の数が多く見られる。

5. 複合形容詞の強勢「強強型」についての考察

強強という強勢型は、『逆引き辞典』、『新英和』、OED 第2版等で生じるが、OED 第2版で生じる強強型の割合は日本の辞書と比べると極めて少ないことが次の(10)の表で分かる。

(10) 調査対象語 336 語における強強型の占める割合

	『逆引き辞典』	『新英和』	Longman (2008)	OED 第2版
強強型の語数	82	117	0	13
強強型の割合	24%	35%	0%	4%

* 小数点以下四捨五入

イギリスの辞書2冊では強強型が占める割合が0か、もしくは4%であるのに対し、日本の辞書2冊では、24%と35%という高い数値を示している。

さらに、辞書以外で発音に関する文献を見た場合、イギリスで出版された *Gimson's pronunciation of English* 5th ed. (1994: 209) では、やはり強強型は用いられていないことが分かる。

Adjectives

(i) with initial accent: 'bloodthirsty, 'gobsmacked, 'headstrong,

(ii) with final accent: deep-'seated, ham-'fisted,

(Cruttenden 1994: 209)

Cruttenden は、Compounds functioning as adjectives を “with initial accent” と “with final accent” の 2 種類に分類しており、強強型に該当する強勢型は提示していない。このように、強強という強勢型は日本において用いられることが多いようである。

6. おわりに

本稿では、明確にされていない複合形容詞の強勢型について、日本の辞書、小学館『プログレッシブ英語逆引き辞典』(1999)、研究社『新英和大辞典』第6版(2002)とイギリスの辞書、*Longman Pronunciation Dictionary* (2008)、*Oxford English Dictionary* 2nd ed. (1989) をもとに考察を進めてきた。複合形容詞の強勢型について、文献や辞書を比較、検討することにより、複合語強勢規則は複合名詞に適合しても複合形容詞には適合しないことが分かった。また、複合語の第1要素が強勢型を決定づけるわけではないという結果が導き出せた。さらに、辞書により、同じ複合形容詞に異なる強勢型が付与されているという問題点にも辿り着いた。*Longman Pronunciation Dictionary* (2008) では、一つも生じない強強型が、イギリスの *Oxford English Dictionary* 2nd ed. (1989) では、全体の4%を占める割合で生じ、日本の辞書では、24%以上を占める割合で生じることが明らかになったことにより、強強型は日本の辞書に多く見られる強勢型であるということが分かった。なぜ辞書によって異なる強勢型が付与されているのか、また、なぜ、イギリスの発音辞典には生じない強強型が、日本の辞書には多く生じるのか、今後、さらに調査対象を広げ、複合形容詞の強勢型について、調査、研究を進めていきたいと考えている。

参考文献

- Cruttenden, Alan (1994) *Gimson's Pronunciation of English*, Hodder Education.
 Gimson, A.C. (1980) *A Practical Course of English Pronunciation*, Edward Arnold.
 J.C.Wells (2006) *English Intonation*, University Press.
 Quirk, R, and Ste, G. (1990) *English in Use*, Longman Group UK Limited.
 Roach, P. J. (2004) *English Phonetics and Phonology*, Cambridge University Press.
 岩崎研究会 編 (1981) 『英語辞書の比較と分析第2集』 研究社。
 箕寿雄・今井邦彦 (1971) 『音韻論Ⅱ』 (英語学大系第2巻) 大修館書店。
 影山太郎 編 (2009) 『形容詞・副詞の意味と構文』 研究社。
 加須屋弘司・矢田裕士・野田哲雄 (1989) 『現代英語音声学』 英潮社。
 窪菌晴夫 (1996) 『英語の複合語強勢について』 (言語の深層を探ねて) 英潮社。
 窪菌晴夫 (1998) 『音声学・音韻論』 くろしお出版。
 窪菌晴夫・太田聡 (1998) 『音韻構造とアクセント』 研究社。
 小泉保・牧野勤 (1990) 『音韻論Ⅰ』 (英語学大系第1巻) 大修館書店。
 柴田省三 (1975) 『語彙論』 (英語学大系第7巻) 大修館書店。
 竹林滋 (1996) 『英語音声学』 研究社。
 竝木崇康 (1985) 『語形成』 (新英文法選書第2巻) 大修館書店。
 竝木崇康 (1991) 『現代英語学の諸相』 (宇賀治正明博士還暦記念論文集) 開拓社。
 林哲郎 (1968) 『英語辞典発達史』 開文社。
 御園和夫 (1995) 『英語音声学研究—理論と応用』 和広出版。

辞書・辞典類

- 國廣哲彌・堀内克明 (2006) 『プログレッシブ逆引き辞典』 小学館。
 竹林滋 (2002) 『新英和大辞典 第6版』 研究社。
 Simpson, J.A, and Weiner, E.S.C. (1989) *Oxford English Dictionary* 2nd ed, Clarendon Press.
 Wells, John Christopher (2008) *Longman Pronunciation Dictionary*, Pearson Education.

付録 調査対象語 (全 336 語)

-eyed

almond, beady, black, bleary, blue, boss, bright, bug, cock, cross, dewy, dry, eagle, glassy, goggle, green, hawk, lynx, misty, one, open, pie, pop, round, sharp, sloe, starry, wide, wild

-fired

coal, gas, oil

-free

alcohol, content, cruelty, duty, fancy, hands, lead, nuclear, post, rent, scot, smoke, sugar, tax, toll, trouble

-ful

art, aw, bale, bane, bash, beauty, bliss, boast, bounty, brim, care, cheer, color, delight, dire, disgrace, distaste, distress, distrust, dole, doubt, dread, duty, ease, event, faith, fancy, fate, fear, fit, flavor, force, forget, fright, fruit, gain, glee, grace, grate, guile, harm, hate, health, heed, help, hope, hurt, insight, ire, joy, law, lust, man, master, meaning, merci, mind, mirth, mistrust, mourn, need, neglect, pain, peace, pit, play, plenty, power, prayer, pride, purpose, push, regard, regret, remorse, repose, reproach, resent, resource, respect, rest, revenge, right, rue, shame, sin, skill, sloth, sorrow, soul, spite, stress, success, tact, taste, tear, thank, thought, trust, truth, tune, use, venge, wake, waste, watch, will, wish, wist, woe, wonder, worship, wrath, wrong, youth, zest

-full

bale, brim, chock, cram

-going

easy, in, movie, ocean, on, out, sea, thorough

-happy

slap, trigger, un

-hand

fore, free, hand-to, left, over, right, round, second, third, under

-handed

back, bare, cack, under, empty, even, free, ham, heavy, high, left, open, red, right, single, two

-headed

bald, bare, fat, muddle, pig, pointy, shock, swollen, thick, wooden, bull, clear, cool, empty, hard, hot, level, long, light, woolly, wrong

-hearted

big, broken, chicken, cold, down, faint, full, good, hair, hard, heavy, kind, large, light, lion, open, simple, soft, stout, tender, warm, whole

-minded

absent, bloody, broad, evil, fair, feeble, high, large, light, like, low, narrow, noble, open, public, right, simple, single, small, strong, tough, weak, feeble

-most

back, bottom, eastern, farther, fore, further, hind, in, inner, lower, mid, nether, northern, outer, out, rear, southern, top, up, upper, ut, utter, western

複合形容詞の強勢型についての一考察

—— 4 つの異なるタイプの辞書を用いた比較・分析 103

-some

awe, blithe, bother, burden, cumber, fear, flavor, frolic, ful, glad, frue, hand, irk, lis, lithe, loath, lone, meddle, mettle, nettle, noi, quarrel, tire, toil, tooth, trouble, venture, wear, whole, win, worri

-wide

city, industry, nation, state, world

-white

black and, lily, off, snow

Synopsis

A Study of Stress Patterns of Compound Adjectives in English

NOGAMI Ayako

This is the study of the phonetic and phonological aspects of the stress patterns of compound adjectives in Present-day English. Compounds consist of two words (two elements), both of which can exist independently as English words. Compounds can be written separately, with a hyphen, or as one word. The primary accent in compounds is most commonly on the first element which is called the Compound Stress Rule, e.g. 'day ,break, 'green ,house, and in some cases, this type of accentuation will distinguish the compounds from a more productive phrasal pattern, e.g. ,green 'house. In the Compound Stress Rule, the primary accent is put on the first element of the compound, and then secondary accent is put on the second element of the compounds. This is the pattern called strong-weak. Besides the stress pattern of strong-weak, there are two other patterns, which means that there are three stress patterns for compounds as follows: 1. weak-strong 2. strong-weak 3. strong-strong. These are the stress patterns of compounds which appear in a dictionary. Although there are three stress patterns in a dictionary, pattern 3 is an area of uncertainty. The investigation of stress of compounds has been done using two dictionaries published in Japan: Reverse Dictionary and New English-Japanese Dictionary and two other dictionaries published in England: *Longman Pronunciation Dictionary* and *Oxford English Dictionary*. The result showed that there are many pattern 3 examples in the Japanese dictionaries and only a few examples in the English dictionaries. Several previous studies by Roach, Wells, and Japanese researchers such as Kageyama, Kubozono, Ota and Misono are also overviewed in this study.